

メッセージアウトライン

サムエル記第一31:1～第二1:1～27

「勇士たちは倒れた」

31:1～7ギルボア山の戦い

[1-2]「さて、ペリシテ人はイスラエルと戦った。イスラエルの人々はペリシテ人の前から逃げ、ギルボア山で刺されて倒れた。ペリシテ人はサウルとその息子たちに追い迫って、サウルの息子ヨナタン、アビナダブ、マルキ・シュアを打ち殺した」

「ギルボア山」…ペリシテ人が陣を敷いたイスラエルの北部シュネムの南東数キロメートルのところにある山。海拔約500メートル。サウルの率いるイスラエル軍はこのギルボアに陣を敷いていた。→28:4

この戦いにより、まずサウルの三人の息子たちが戦死した。

[3]「攻撃はサウルに集中し、射手たちが彼を狙い撃ちにしたので、彼は射手たちのゆえにひどい傷を負った」

彼は王としての鎧や王冠を身につけていたので、敵からも見分けがついたのであろう。サウルは槍や刀での接近戦は強かったと思われるが、ペリシテ人はそれゆえに弓による集中攻撃で彼を狙い撃ちにしたので彼はひどい傷を負ってしまった。

[4-6]「サウルは道具持ちに言った。『おまえの剣を抜いて、私を刺し殺してくれ。さもないと、あの無割礼の者たちがやって来て、私を刺し殺し、私をなぶりものにするだろう。』しかし、道具持ちは非常に恐れて、どうていその気になれなかった。それでサウルは剣を取り、その上に倒れ込んだ。道具持ちは、サウルが死んだのを見ると、自分も剣の上に身を伏せて、サウルとともに死んだ。こうしてその日、サウルと三人の息子、道具持ち、それに彼の部下たちはみな、ともに死んだ」

サウルは致命的な傷を負ってしまい、ペリシテ人に生け捕りにされ、なぶりものにされることを恐れ、道具持ちに自分を殺すように命じたが、道具持ちはとてもその気になれなかった。それでサウルは自分の剣を取ってその上に倒れ込んで自決した。そしてそれを見た、道具持ちも同じようにして自決した。こうしてイスラエル軍とペリシテ軍との戦いはペリシテ軍の勝利に終わった。

[7]「谷の向こう側とヨルダン川の向こう側にいたイスラエルの人々は、イスラエルの兵士たちが逃げ、サウルとその息子たちが死んだのを見て、町々を捨てて逃げた。それで、ペリシテ人がやって来て、そこに住んだ」

「谷の向こう側」とはギルボア山から谷を東に下って、ヨルダン川に至るまでの地域。「ヨルダン川の向こう側」とはイスラエルのマナセ部族やガド部族の地であるが、その地の一部をペリシテ人は占領して住むようになった。これはサウルとその息子たちが死に、イスラエル軍が敗北してから、しばらく後のことであろう。

31:8～13ヤベシュ・ギルアデの人々の恩返し

[8-10]「翌日、ペリシテ人が、刺し殺された者たちからはぎ取ろうとしてやって来たとき、サウルと三人の息子たちがギルボア山で倒れているのを見つけた。彼らはサウルの首を切り、彼の武具をはぎ取った。そして、ペリシテ人の地の隅々にまで人を送り、彼らの偶像の宮と民とに告げ知らせた。彼らはサウルの武具をアシュタロテの神殿に奉納し、彼の死体はベテ・シャンの城壁にさらした。」

翌日、ペリシテ人たちは戦場にやって来て、サウルと三人の息子たちが死んでいるのを見つけ、彼らはサウルの首を切り、その武具をはぎ取った。息子たちにも同じようにしたのであろう。そしてすべてのペリシテ人の地に人を送り、彼らの偶像の宮と民にペリシテ軍戦勝を告げ知らせたのである。サウルの首は I 歴10:10によればダゴンの神殿にさらされた。

「アシュタロテ」…古くからフェニキヤ人が崇拝した女神。それがペリシテ人にも伝わっていたのであろう。「ダゴン」…フェニキヤやアッシリヤでも崇拝された上半身人間、下半身魚の穀物豊穰の偶像神。カナンの地の偶像神バアルの父と言われる。

「ベテ・シャン」…ギルボア山の東にある町。ヨルダン川まで約5キロメートル。ここは東西南北を結ぶ街道の交差する場所にあり、その城壁にさらされたサウルと息子たちの死体は多くの人々の目についたことであろう。ひどい仕打ちである。

[11-13]「ヤベシュ・ギルアデの住民は、ペリシテ人がサウルに行った仕打ちを聞いた。そこで勇士たちはみな立ち上がり、夜通し歩いて行き、サウルの死体と息子たちの死体をベテ・シャンの城壁から取り下ろし、ヤベシュに帰って来て、そこでそれらを焼いた。彼らはその骨を取って、ヤベシュにあるタマリスクの木の下に葬り、七日間、断食した」

ヨルダン川東のヤベシュ・ギルアデからベテ・シャンまではヨルダン川をはさんで約20キロメートルの道のりである。しかし、彼らはペリシテ人のサウルと三人の息子たちの死体に対する仕打ちを聞いたとき、夜を徹して、ヨルダン川を渡り、彼らの死体を取り下ろし、帰って来て火葬にし、その骨をタマリスクの木の下に葬り、七日間断食したのである。

「タマリスク」…ぎょりゅうの木。樹高は高いもので18メートルほどになり、ピンクや白の穂状の花が咲く。タマリスクはサウルのギブアの本陣にもあった。→22:6

ヤベシュ・ギルアデの住民はかつてアンモン人に襲われたとき、サウルの率いるイスラエル軍に助けてもらったことがある。→ I サムエル11:1-11 彼らはその恩義を忘れてはおらず、ここでサウルに対する敬意と感謝の思いからこのような恩返しともいえる行為をしたのである。

死体を火葬にしたのは、死体がもう痛んでいたためであろう。

II サムエル1章

[1-2]「サウルが死んだとき、ダビデはアマレク人を打ち破って帰って来ていた。その後ダビデは二日間、ツィクラグにとどまっていた。すると三日目に、見よ、一人の男

がサウルのいた陣営からやって来た。衣は裂け、頭には土をかぶっていた。彼はダビデのところに来ると、地にひれ伏して礼をした」

ダビデはアマレク人たちを打ち破り、奪われていた妻子や家畜、財産を取り戻し、ツィクラグに帰って来ていた。町はすでにアマレク人たちによって、火で焼かれていたので、応急の仮住まいを設けていたのであろう。彼らが帰って来てから三日目に一人の男がやって来てダビデに向かって地にひれ伏して礼をした。衣を裂き、頭に土をかぶるのは非常な悲しみの表現。彼はサウルの陣営から来たのであるが、ダビデはまだ知らない。

[3-5]「ダビデは言った。『どこから来たのか。』彼は言った。『イスラエルの陣営から逃れてきました。』ダビデは彼に言った。『状況はどうか。話してくれ。』彼は言った。『兵たちは戦場から逃げ、しかも兵たちの多くの者が倒れて死にました。それに、サウルも、その子ヨナタンも死にました。』ダビデは、報告をもたらしたその若い者に言った。『サウルとその子ヨナタンが死んだことを、どのようにして知ったのか。』」

この若者はイスラエルの陣営から逃れて来たこと、多くの兵たちが戦死し、また逃亡したこと、そして、サウルとその子ヨナタンも死んだことを伝えた。ダビデはどうしてサウルやヨナタンの戦死を知ったのかとこの若者に問う。

[6-10]「報告をもたらしたその若い者は言った。『私は、たまたまギルボア山にいましたが、見ると、サウルは自分の槍にもたれ、戦車と騎兵が押し迫っていました。サウルが振り返って、私を見て呼びました。私が『はい』と答えると、私に『おまえはだれだ』と言いましたので、『私はアマレク人です』と答えますと、『さあ、近寄って、私を殺してくれ。激しいけいれんが起こっているが、息はまだ十分あるから』と言いました。私は近寄って、あの方を殺しました。もう倒れて生き延びることができないと分かったからです。私は、頭にあった王冠と、腕についていた腕輪を取って、ここに、あなた様のところに持って参りました。』」

この若者はアマレク人でたまたまギルボア山におり、敵のペリシテ人がサウルに押し迫り、彼が近くにいた自分呼んで、殺すように命じたこと、もうサウルが生き延びることができないと分かって彼を殺し、その王冠と腕輪を取ってダビデのところを持って来たと言った。

[11-12] この報告を聞いたダビデと家来たちは自分の衣をつかんで引き裂き、悲しみと哀悼の意を表し、サウルとヨナタン、主の民、イスラエルの家のために泣き、夕方まで断食した。

[13-16]「ダビデは自分に報告したその若い者に言った。『おまえはどこの者か。』彼は言った。『私はアマレク人で、寄留者の子です。』ダビデは彼に言った。『主に油注がれた方に手を下して殺すのを恐れなかったとは、どうしたことか。』ダビデは家来の一人を呼んで言った。『これに討ちかかれ。』彼がその若い者を討ったので、若い者は死んだ。ダビデは若い者に言った。『おまえの血は、おまえの頭上に降りか

かれ。おまえ自身の口で、【私は主に油注がれた方を殺した。】と証言したのだから。』

ダビデはサウルからいのちを狙われ、イスラエル中を追い回されていた。それゆえ、このアマレク人の若者は瀕死のサウルの願いでサウルを殺したことで、彼が身につけていた王冠と腕輪をダビデのところに持って来たことによって、ダビデからほめられると思っていたのかもしれない。しかし、結果は逆であった。ダビデは今まで何度もサウルを殺す機会があった。しかし、サウルが主に油注がれた者、すなわち主なる神によって王として選ばれ任命された者であるという理由で、決して手にかけることをしなかった。そのようなサウルを剣にかけて殺すのを恐れなかったとは、どうしたことかとダビデは言う。そして部下の一人を呼んで、彼を討ち取らせた。「おまえの血はおまえの頭上に降りかかれ…」とは彼のしたことの結果をダビデが言い表したことばである。

ここでこのアマレク人の若者に対する疑問点がいくつかある。

①彼は「たまたまギルボア山にいた」(6)というが、戦雲漂う天下分け目の戦いの戦場のギルボア山になぜいたのか。ピクニックにでも行っていたのか。あるいは観客席から戦いの様子を見ようとしていたのか。不可解である。

②彼は「私はアマレク人で、寄留者の子です」(13)と言ったがアマレク人は主によって絶滅すべきことが命じられているのに、イスラエル人の中に寄留できたのか。

③サウルのすぐ近くにいたということは、彼はサウル軍の一人であったのか。

④サウルの道具持ちさえ、瀕死のサウルを殺すことを躊躇したのに(31:4)なぜ彼は殺すことができたのか。

⑤ I サムエル31:4～6のサウル戦死の状況と、アマレク人が言った II サムエル1:6～10の状況が合わない。どこかの部分でこの若者がうそを言っていたのなら、彼はそのうそのために自分のいのちを失うことになる。ダビデに気に入られようと彼は話を脚色してしまったのか。

[17-18]「ダビデは、サウルのため、その息子ヨナタンのために、次の哀歌を歌った。これはユダの子らに弓を教えるためのもので、『ヤシャルの書』にまさしく記されている」

「哀歌」とは悲しみ嘆きの歌のこと。「ヤシャルの書」とは古くからあったが、ダビデの時代に編纂されたイスラエルの詩歌集と思われる。

「ユダの子らに弓を教えるためのもの」とは22節で「ヨナタンの弓は退くことがなく」と言われているように、弓の名手であったヨナタンを偲びつつ、この歌を歌い、ユダの子どもたちに弓を教えたと思われる。

[19]「イスラエルよ、君主はおまえの高き所で殺された。ああ、勇士たちは倒れた」
「ああ、勇士たちは倒れた」…この表現は3回繰り返される。→19, 25, 27 勇士であるサウルとヨナタンの死に対する哀歌である。

[20]「これをガテに告げるな。アシュケロン通りに告げ知らせるな。ペリシテ人の娘らを喜ばせないために。無割礼の者の娘らが喜び踊ることがないために」

ガテもアシュケロンもペリシテ人の住む大きな町。「娘ら」とはこの場合、住民のこと。

[21]「ギルボアの山よ。高原の野よ。おまえたちの上に、露は降りるな。雨も降るな。そこでは勇士たちの盾が汚され、サウルの盾に油も塗られなかったからだ」

「…露は降りるな、雨も降るな」とは、その地に神のさばきが下って、何の実りもなくなるようにとの願い。盾に油を塗るのは、矢が当たっても滑り落ちるようにするため。しかし、サウルは戦死してしまったので、もう油も塗られることはない。

[22]「殺された者の血から、勇士たちの脂から、ヨナタンの弓は退くことがなく、サウルの剣も、空しく帰ることがなかった」

殺された者の体からは血や脂肪が吹き出て来る。ヨナタンの弓やサウルの剣はどのように敵を倒さずして、退くことがなかった。

[23]「サウルもヨナタンも、愛される、立派な人だった。生きているときも死ぬときも、二人は離れることはなく、驚よりも速く、雄獅子よりも強かった」

22~23節で、二人の武勇がたたえられている。

[24]「イスラエルの娘たちよ、サウルのために泣け。サウルは、紅の衣を華やかにおまえたちに着せ、おまえたちの装いに金の飾りを着けてくれた」

サウルはこのような高価な着物や金の飾り物を、敵を倒して奪い、与えてくれた。

[25-26]「ああ、勇士たちは戦いのさなかに倒れた。ヨナタンはおまえの高き所で殺された。あなたのために私はいたく悲しむ。私の兄弟ヨナタンよ。あなたは私を大いに喜び樂しませ、あなたの愛は、私にとって、女の愛にもまさって、すばらしかった」

ここは特にヨナタンへの哀歌である。ヨナタンのダビデに対する愛のすばらしさをほめたたえている。「おまえの高き所」とはギルボア山のこと。

[27]「ああ、勇士たちは倒れた。戦いの器は失せた」

「勇士たち」…サウルとヨナタンのこと。このように切々たることばによってこの哀歌は終わる。

サウルは不信仰と自己中心、高慢で執拗にダビデのいのちを狙う悪王。ダビデはサウルから逃走を続ける信仰の人と私たちは一面的に考えやすいが、そのようなサウルでもその戦死に際してダビデは切々と哀歌を唱える。それは彼が主なる神によって油を注がれ、イスラエルの王とされたがゆえであった。サウルがどのような最期を迎えてもその事実は変わらない。ダビデ自身も次の王となるべく預言者サムエルによって油を注がれているが、彼は決してその事実にあぐらをかいて、サウルを見下してはいない。アマレクの若者を討ったのも、彼が主によって油注がれたサウルに手をかけたというその一点であった。サウルとヨナタンという勇士たちは倒れた。国

家としてのイスラエルにとってもダビデにとっても、これは悲しむべき一大事である。これからどのような展開になるのか誰も知らない。しかし、このような悲劇を通して、主の摂理のみ手はダビデを導いていく。

私たちも、自分の生涯にどのような出来事が起こって来ても、それが主のみ手を通して来るのならば、主が最善をなしてくださることを信じて、喜びも悲しみも受け止めて、信仰をもって歩いていかなければならない。→エレミヤ29:10～14, ローマ8:28